

～藩から県への移行に見る幕末・維新期の房総～

(1) 戊辰戦争と房総

幕末のころの房総は、徳川幕府の影響が強い地域でした。維新を目指す新政府軍は江戸進撃に際し、房総最大の譜代藩である佐倉藩を従わせ、大多喜城攻略などに同行させました。一方、上総の請西藩（木更津市）は、旧幕府海軍の援助により江戸湾対岸の小田原藩や沼津藩などと協力して、新政府軍の関東平定に抵抗しました。

当時の騒然とした房総の様子について、新政府の軍政事務を担当した大村益次郎は、佐倉・大多喜・久留里（君津市）・佐貫（富津市）の城は空も同様だが、藩士や民衆の根強い抵抗は恐怖であると語っています。



(2) 徳川氏の処分による房総への領地替え

房総での戊辰戦争が一段落した1868（明治元年）年、徳川將軍家に対し駿河府中藩70万石への領地替えが実施されました。これにより駿河・遠江（静岡県）にあった浜松・沼津など7藩すべてが安房・上総地方への国替となったのです。房総は譜代小藩と旗本領、幕府領によって占められていたため、藩領以外の土地は新政府の直轄地となり、そのことが新たな藩を設置するうえでの好条件となりました。



(3) 廃藩置県と房総

江戸開城の翌月、「政体書」が公布され、地方は、「府・藩・県三治制*」によって統治されることになりました。

新政府は、1868年7月、房総の旧幕府領や旗本領を直轄地とし、安房・上総に宮谷県、下総に葛飾県を設置しました。一方、直轄地以外の諸藩に対しては、廃藩置県（1871年）の実施により、房総には26県が成立しました。

その後、1871（明治4）年11月の大規模な府県廃合により、房総地域では木更津県と印旛県が設置され、さらに1873（明治6）年6月15日、両県の合併により千葉県が誕生しました。これが「県民の日」の由来です。当時の人口は約103万人で、県庁は千葉町に置かれました。初代長官（権令、のち県令）には、柴原和が任命されました。



*用語解説【府・藩・県三治制】旧大名の藩はそのまま行政の一単位とし、府と県は旧幕府の直轄地を新政府が行政の単位として治める方法。